

ハミルトニアンスимуレーションを 用いた 線形弾性体の動的構造解析

*我妻航也¹⁾, 遠藤克浩²⁾, 寺田賢二郎¹⁾

1. 東北大学

2. 産業技術総合研究所

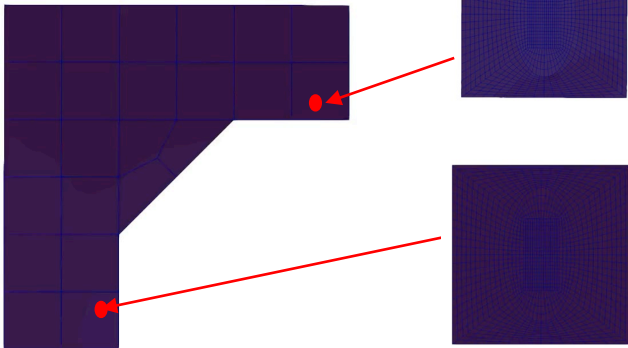
◆東北大学大学院工学研究科 土木工学専攻 先進計算力学研究室（寺田研究室）

研究課題

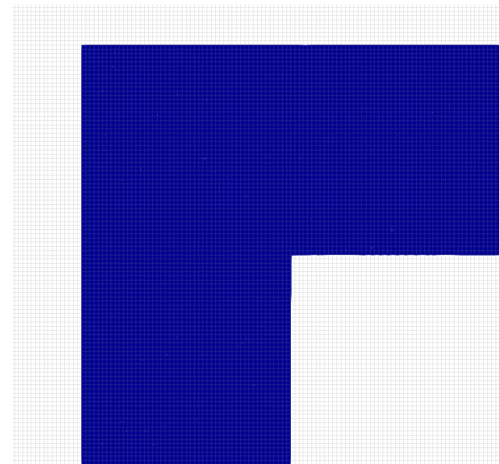
主に固体を対象とした数値シミュレーション技術の開発と現象の予測・評価

研究例 ～マルチスケール解析・破壊シミュレーション～

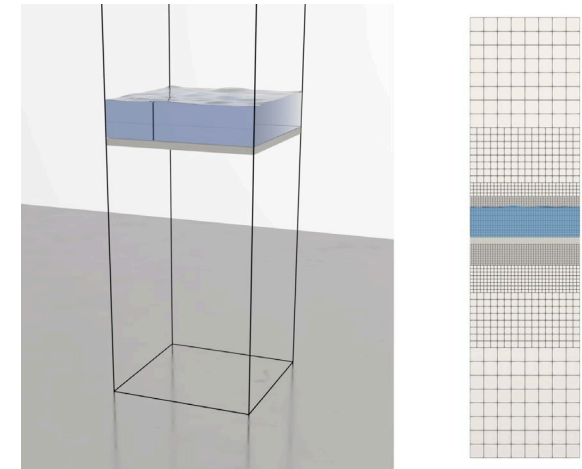
サロゲートモデルベース
マルチスケール解析



代理モデルによる複合材料のマルチスケール解析^[1]



Material point method (MPM) による
離散き裂シミュレーション^[2]



流体・構造破壊連成シミュレーション^[3]

[1] Nakamura, A., Yamanaka, Y., Nomura, R., Moriguchi, S., and Kenjiro, T.: *Comput. Meth. Appl. Mech. Eng.*(2025)

[2] Sugai, R., Han, J., Moriguchi, S., and Kenjiro Terada: *Comput. Meth. Appl. Mech. Eng.*(2024)

[3] 平山大悟, 下畑和希, 野村怜佳, 森口周二, 青木尊之, 寺田賢二郎: 計算工学講演会論文集(2025)

所属研究室の取り組み

研究例 ～マルチフィジックス・災害シミュレーション～

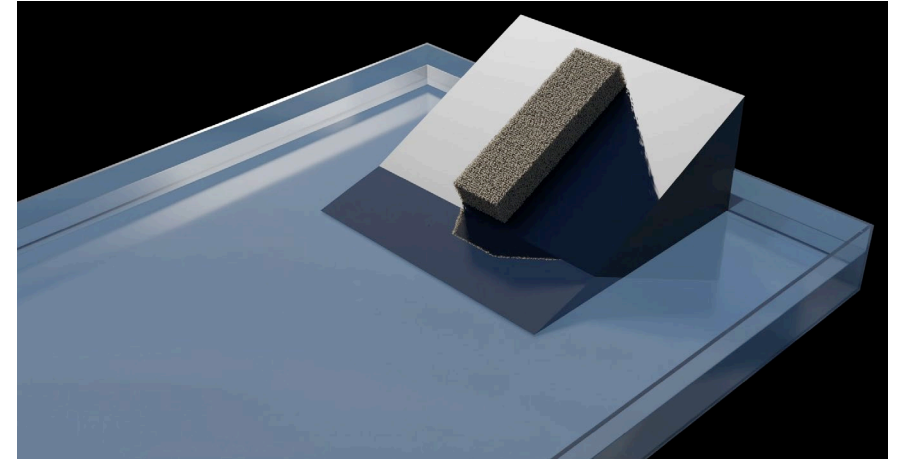
※土は連続体の固体として扱う



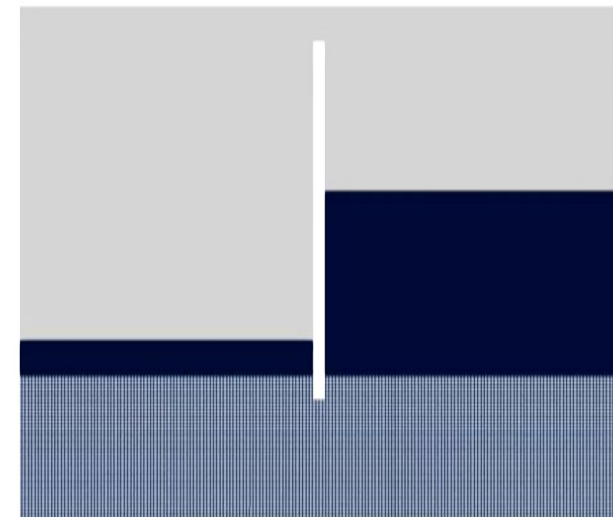
土砂流動シミュレーション^[4]

300m × 600m × 標高(500m程度) 1m格子

→数千万自由度の計算 × 解析ステップ



土砂の水中流入シミュレーション^[5]



パイピングシミュレーション^[6]

[4]木村凌一: 東北大学大学院工学研究科土木工学専攻修士論文(2024)

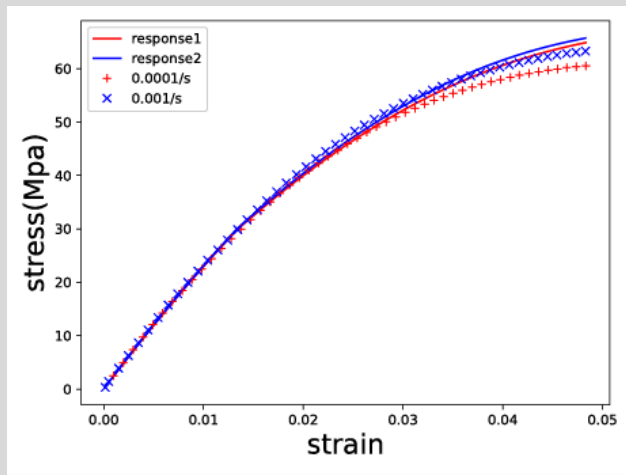
[5] Pan, S., Nomura, R., Ling, G., Takase, S., Moriguchi, S., and Kenjiro Terada: *Int. J. Numer. Meth. Fluids.*(2023)

[6] Suzuki, Y., Sugai, R., Hidano, S., Nomura, R., Moriguchi, S., Kodaka, K., and Kenjiro, T.: *Under Review*

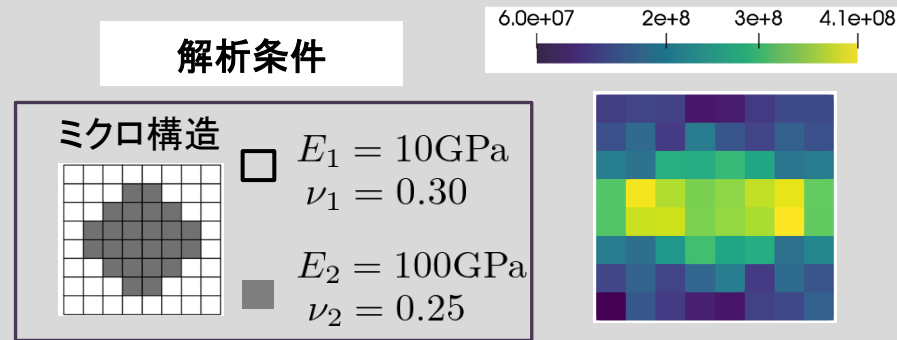
所属研究室の取り組み

研究例 ～量子コンピューティング～

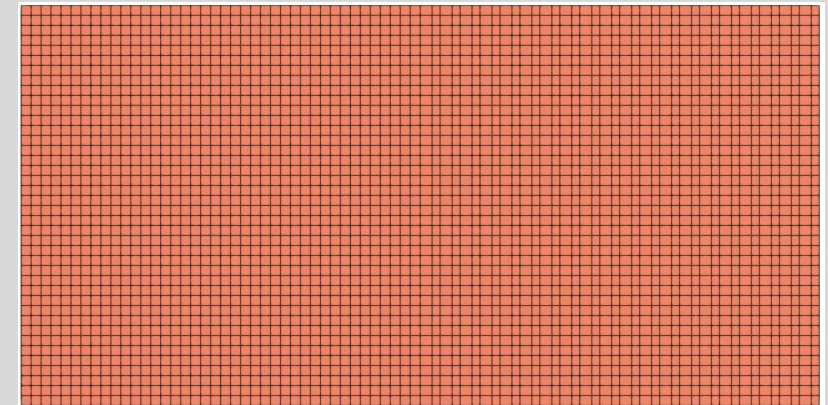
- ✓ 量子アニーリング(2023)量子ゲート(2024～現在)
- ✓ 絶賛勉強中(量子コンピューティング, 量子力学については素人)



FMQAによる材料パラメータ同定^[7]



QFT均質化を用いたマイクロ構造解析^[8]



QAによる連続体のトポロジー最適化^[9]

色々としたものの, , ,

根本的にやりたいことは $M\ddot{d} + C\dot{d} + F_{int}(d) = F_{ext}$ または $F_{int}(d) = F_{ext}$ を解くこと!!!

▶ 固体の運動をシミュレーションする量子アルゴリズムはあるか? ⇒ほぼない

[7] 我妻航也: 東北大学工学部建築・社会環境工学科卒業論文(2024)

[8] 飯塚聡: 東北大学工学部建築・社会環境工学科卒業論文(2025)

[9] Sukulthanasorn, N., Xiao, J., Wagatsuma, K., Nomura, R., Moriguchi, S., and Kenjiro Terada: *Comput. Meth. Appl. Mech. Eng.* (2025)

計算固体力学

■ 代表体積要素(RVE)問題^[10]
FFT均質化⇒QFT均質化

■ トポロジー最適化^[11]
感度分析を量子アルゴリズムで代替

▶ 固体の運動(動的・静的問題)を
量子コンピュータで解く手法はない

量子コンピュータ

■ バネマス系の振動シミュレーション^[12]



⇒時間発展問題を解く強力な量子アルゴリズムの利用

質量行列 M が対角行列
行列の平方根の計算(後述)を無視

▶ 固体の連続体に適用できない

量子特異値変換(QSVT)を用いたハミルトニアンシミュレーション(HS)による
線形弾性体の単振動問題の時刻歴応答解析

【最終目的】

動的構造解析のための量子アルゴリズムの開発

[10] Burigede Liu and Michael Ortiz and Fehmi Cirak: *Comput. Meth. Appl. Mech. Eng.*(2024)

[11] Naruethep Sukulthanasorn and Kenjiro Terada: *Comput. Meth. Appl. Mech. Eng.*(2026)

[12] Babbush, Ryan and Berry, Dominic W. and Kothari, Robin and Somma, Rolando D. and Wiebe, Nathan : *Phys. Rev. X*(2023)

✓ ハミルトニアンシミュレーション(HS)とは

定義

(時間依存しない)シュレディンガー方程式に基づく物理系の時間発展を量子コンピュータでシミュレーションする手法

運動方程式

$$M\ddot{d} + Kd = 0$$

変形

シュレディンガー方程式

$$\frac{d}{dt} |\psi(t)\rangle = -iH(t) |\psi(t)\rangle$$



✓ 時間依存しない場合 $H(t) = H$

$$|\psi(t)\rangle = e^{-iHt} |\psi(0)\rangle \quad \text{状態ベクトル}$$

ユニタリ行列

⇒量子計算可能

ハミルトニアン H と状態 $|\psi\rangle$ に対して時刻 t での $e^{-iHt} |\psi\rangle$ を計算する手法

実装方法

◆ トロッター分解

◆ QSVT

解析解を計算しているので
時間積分のような概念はない

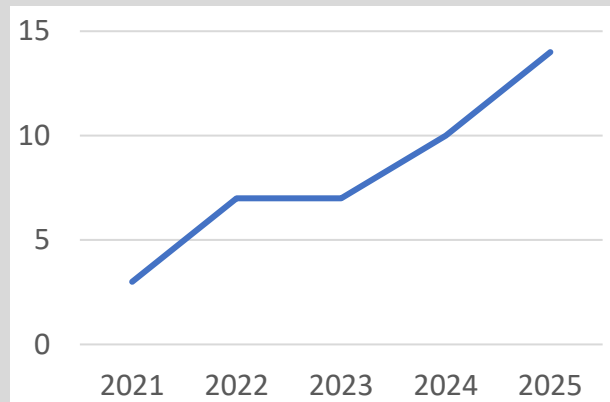
✓ 量子特異値変換(QSVT)^[13]とは

行列 A と多項式 $P(x)$ に対して $A \rightarrow P(A)$ を計算する量子計算フレームワーク

- ◆ 多項式または多項式近似可能な関数を計算可能(制約あり)
- ◆ 多項式次数や近似誤差の評価 \Leftrightarrow アルゴリズムの計算量や誤差の評価

様々な文脈で開発された量子アルゴリズム

- 線形ソルバー(HHL)
 - **QSVTで記述可能**
 - 素因数分解(SHOVのアルゴリズム)
 - ハミルトニアンシミュレーション
- ⇒量子アルゴリズムの大統一理論^[14]



QSVTに関する論文数

- ✓ アルゴリズム設計の単純化
(解きたい問題 \Rightarrow 多項式計算という落とし込み)
- ✓ 計算量や誤差評価の単純化
- ✓ 高い汎用性

⇒注目を集める手法

[13] Gilyén, András and Su, Yuan and Low, Guang Hao and Wiebe, Nathan : *STOC* (2019)

[14] Martyn, J. M., Rossi, Z. M., Tan, A. K. and Chuang, I. L. : *PRX Quantum* (2021)

式変形と計算プロセス

単振動の式⇒シュレディンガー方程式への変形

※Aのブロックエンコーディングの存在を仮定

- ✓ 運動方程式の変換(量子的な要請)

$$\underline{M\ddot{d} + Kd = 0} \quad \text{FEM離散化} \quad M \text{は集中質量行列} \quad K \text{は剛性行列}$$

$$\Downarrow \quad y = \sqrt{M}d \quad A = \sqrt{M^{-1}K\sqrt{M^{-1}}}$$

$$\ddot{y} + Ay = 0 \quad A \text{は正定値対称行列}$$

- ✓ 状態ベクトル ψ とハミルトニアン H の定義

①QSVT: H の構築
 $P(x) \approx \sqrt{x}$

②QSVT: H の時間発展の計算
 $P(x) \approx e^{-ixt}$
(③振幅増幅: 割愛)

$$\psi(t, x) = \begin{pmatrix} \dot{y} \\ \sqrt{A}y \end{pmatrix}, \quad H = i \begin{pmatrix} 0 & -\sqrt{A} \\ \sqrt{A} & 0 \end{pmatrix}$$

$$|\psi(t)\rangle = e^{-iHt} |\psi(0)\rangle$$

- ✓ シュレディンガー方程式との比較

$$\frac{d\psi}{dt} = \begin{pmatrix} \dot{y} \\ \sqrt{A}\dot{y} \end{pmatrix}, \quad -iH\psi = \begin{pmatrix} -Ay \\ \sqrt{A}\dot{y} \end{pmatrix}$$

成立!!!



$$\underline{\frac{d}{dt} |\psi(t)\rangle = -iH |\psi(t)\rangle}$$

検証例題①

- ✓ Luangsirapornchaiら^[15]による検証の再現
- ✓ Qiskit2.0^[16] statevectorシミュレーション

ケースA



$$k_{1,2} = k_{2,3} = k_{3,4} = 1$$

$$m_1 = m_2 = m_3 = m_4 = 1$$

$$\mathbf{d}(0) = \begin{pmatrix} 0 \\ 0.3 \\ 0.7 \\ 1.0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{d}\dot{(0)} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

ケースB



$$k_{1,2} = k_{2,3} = k_{3,4} = 1$$

$$m_1 = m_4 = 99999, \quad m_2 = m_3 = 1$$

$$\mathbf{d}(0) = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{d}\dot{(0)} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

ケースC



$$k_{1,2} = k_{2,3} = k_{3,4} = 1$$

$$m_1 = 1, m_2 = 100, m_3 = 2$$

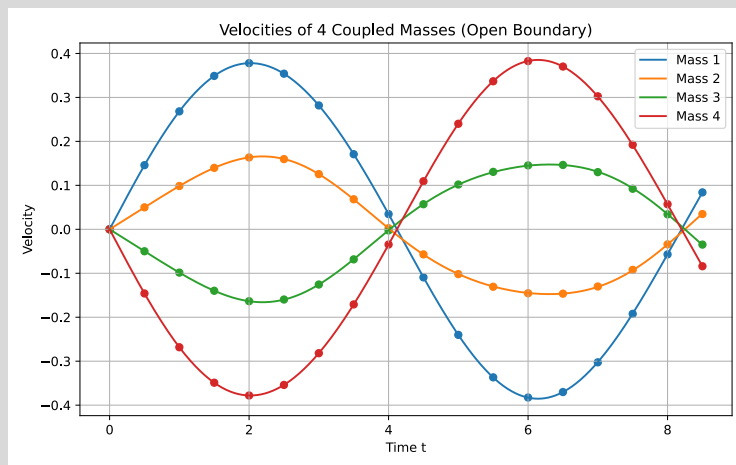
$$\mathbf{d}(0) = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{d}\dot{(0)} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

[15] Luangsirapornchai, N., Sanglaor, P., Sornsang, A., Bressan, S., Chotibut, T., Suksen, K., & Chongstitvatana, P., IEEE Access, (2025)

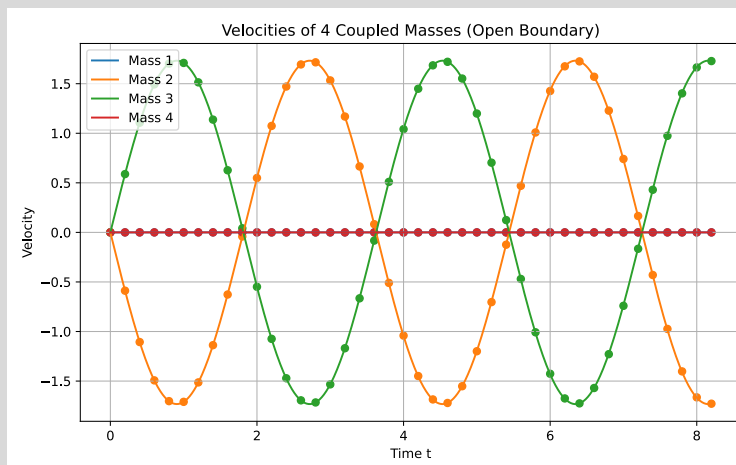
[16] Javadi-Abhari, Ali and Treinish, Matthew and Krsulich, Kevin and Wood, Christopher J and Lishman, Jake and Gacon, Julien and Martiel, Simon and Nation, Paul D and Bishop, Lev S and Cross, Andrew W and others: *arXiv preprint arXiv:2405.08810* (2024)

検証例題①

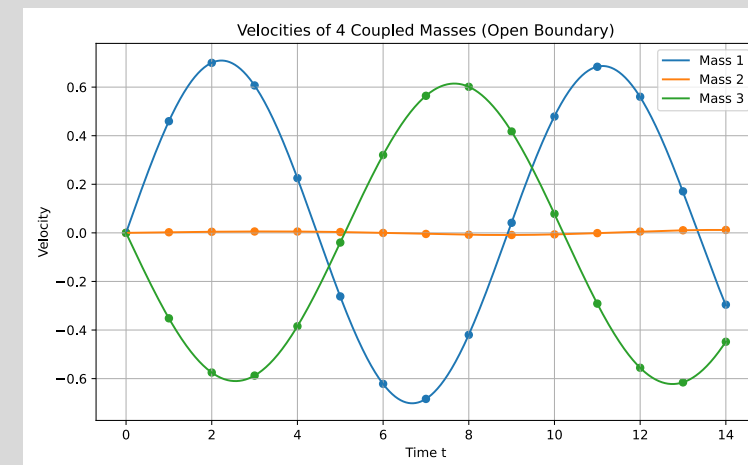
ケースA



ケースB



ケースC



速度

時刻

量子シミュレーション結果

古典解(ルンゲクッタ)

- 質点1 ●
- 質点2 ●
- 質点3 ●
- 質点4 ●

-
-
-
-

▶ 既往研究と同じ結果
手法の妥当性を確認

検証例題②③

✓ 問題設定

・モデル

平面応力における等方線形弾性体(2次元)

・サイズ

正方形構造: 横1m × 高さ1m 厚さ0.05m

長方形構造: 横1m × 高さ6m 厚さ0.05m

・初期条件

$v_0 = 0.1y$ (m/s)で分布

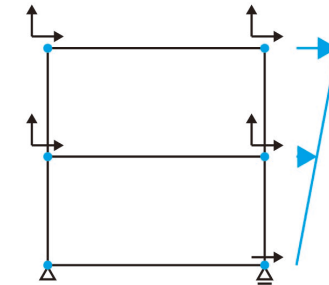
・材料パラメータ

ヤング率200kPa, ポアソン比0.3, 密度1kg/m³

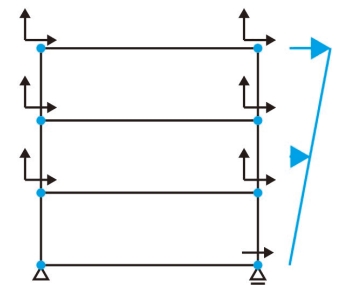
・計算機

Qiskit2.0statevectorシミュレーション
(古典コンピュータ)

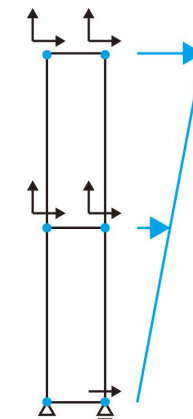
初速度: $v_0 = 0.1y$ m/s



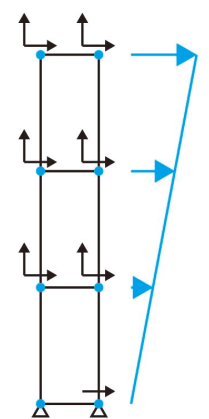
2 要素
(6 節点 9 自由度)



3 要素
(8 節点 13 自由度)



2 要素
(6 節点 9 自由度)



3 要素
(8 節点 13 自由度)

検証例題②(正方形構造)

速度

厳密解

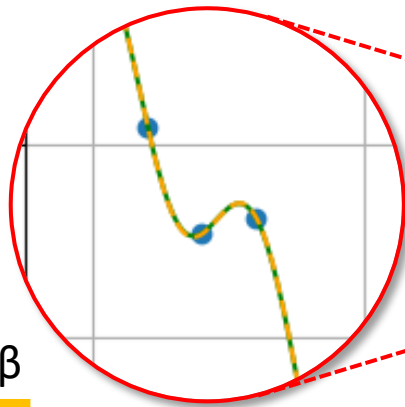
ニューマークβ

● 提案手法

厳密解との絶対誤差

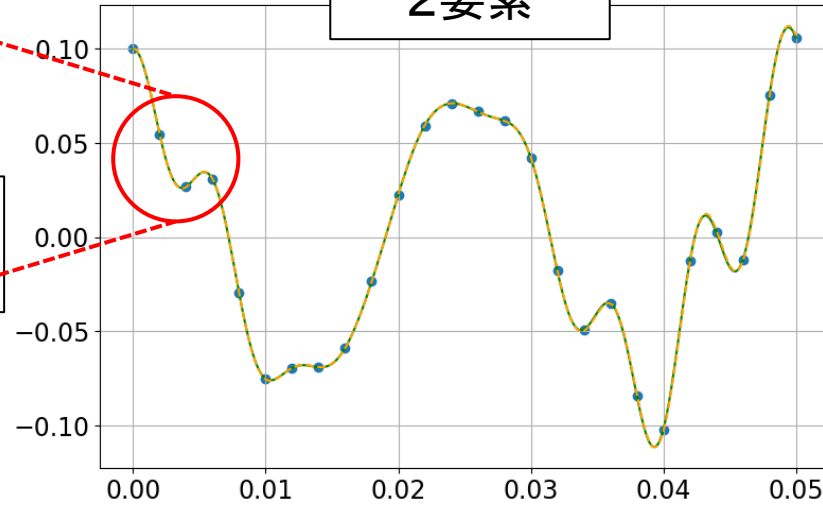
✓ $10^{-8} \sim 10^{-5}$ ほどで誤差が推移

▶ 手法の妥当性を確認
線形弾性体の単振動
問題は量子計算可能

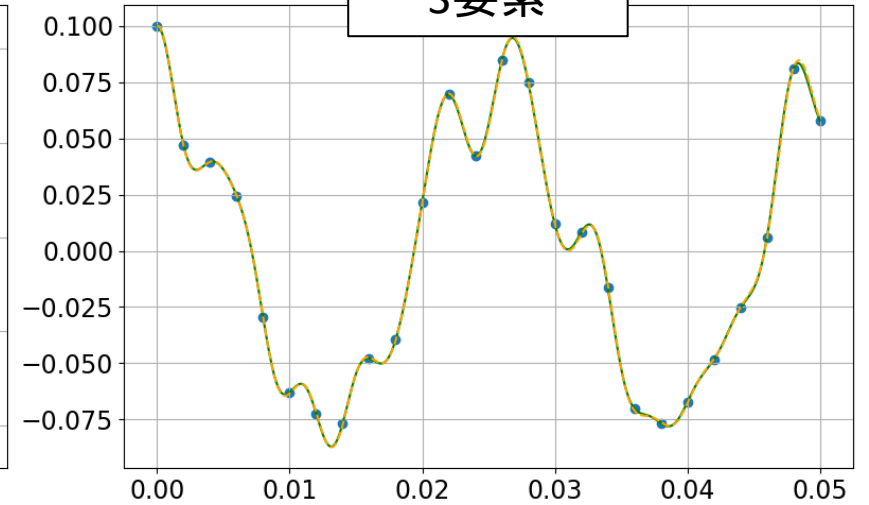


速度

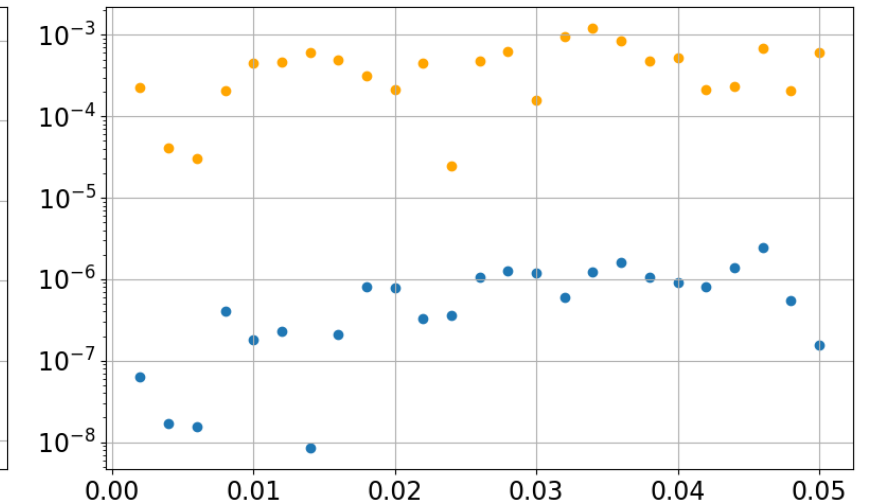
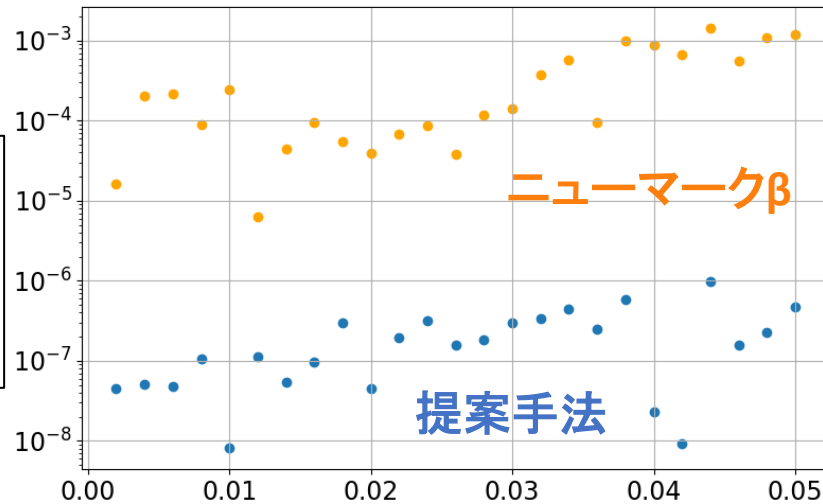
2要素



3要素



絶対誤差



時刻

検証例題③(長方形構造)

速度

厳密解

ニューマークβ

● 提案手法

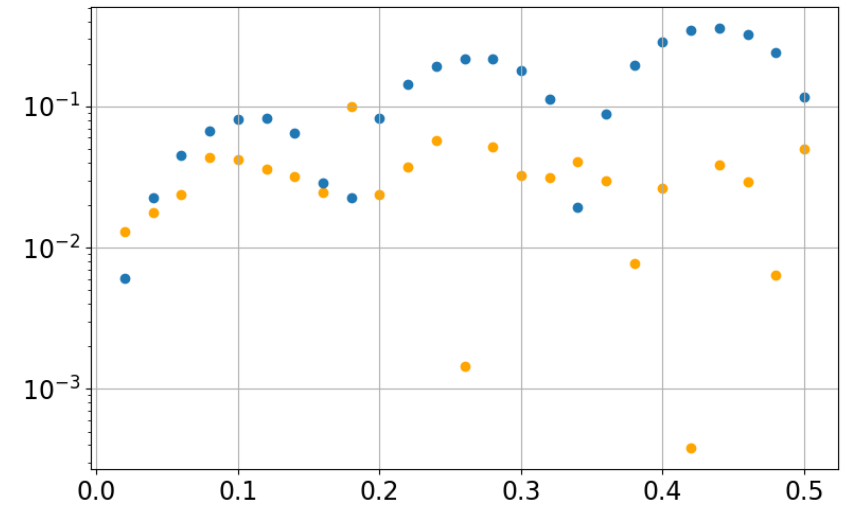
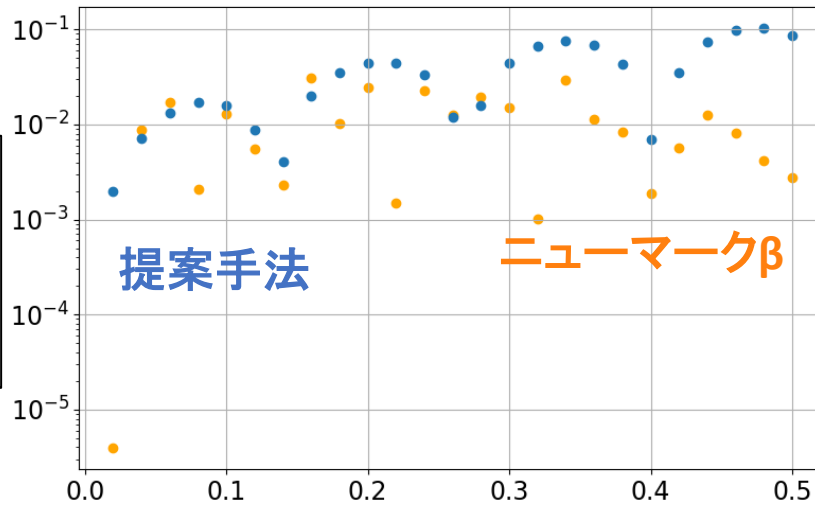
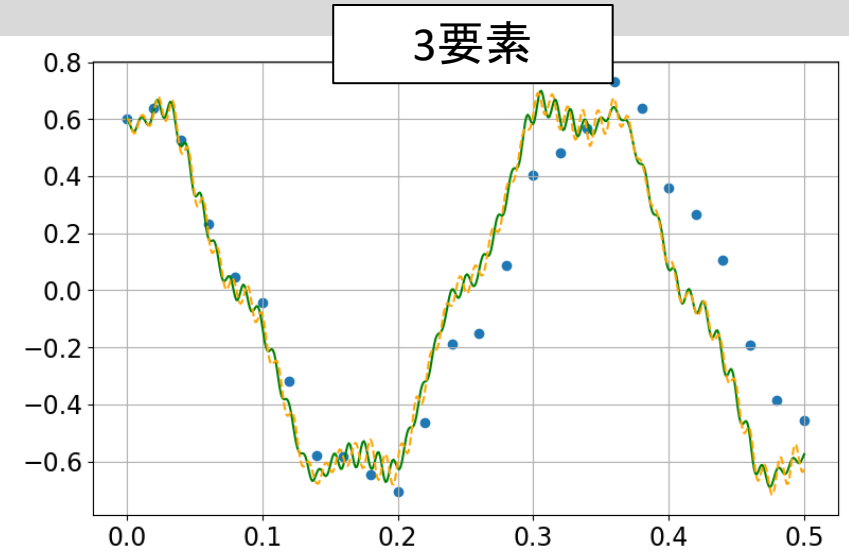
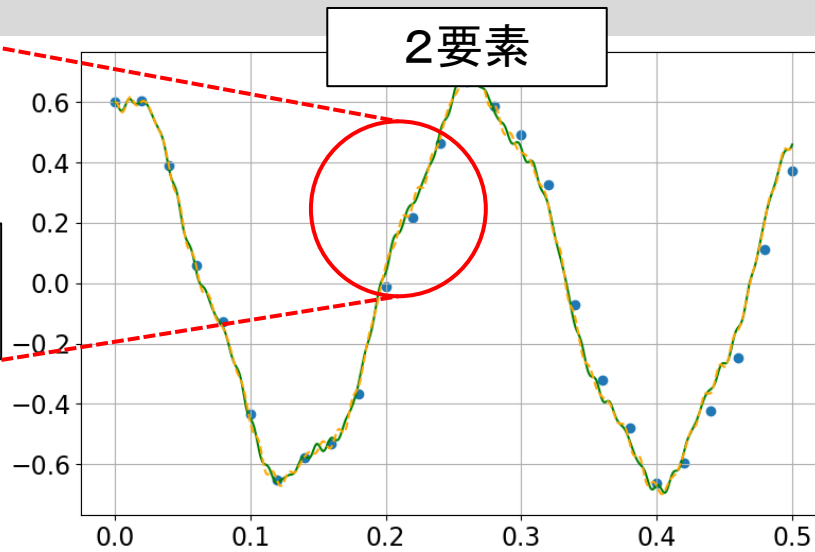
速度

厳密解との絶対誤差

✓ $10^{-2} \sim 10^{-0}$ ほどで誤差が推移

誤差の蓄積を確認
精度の問題依存性の確認
(多項式近似精度に起因)

絶対誤差



時刻

✓ ニューマークβ

— ステップ数

$$\frac{t}{\Delta t} = O\left(\frac{t}{\sqrt{\varepsilon_{\text{NM}}}}\right)$$

— 線形ソルバー (CG法を仮定)

$$O(\sqrt{\kappa} \log(1/\varepsilon_{\text{CG}}))$$

$$Q_{\text{NM}} = O\left(\frac{t}{\sqrt{\varepsilon_{\text{NM}}}} \cdot \sqrt{\kappa} \log(1/\varepsilon_{\text{CG}})\right)$$

✓ 提案手法

— \sqrt{x} の計算量^[17]

$$Q_{\text{root}} = O\left(\frac{1}{\varepsilon_{\text{root}}^2} \log(1/\varepsilon_{\text{root}})\right)$$

— e^{-ixt} の計算量^[14]

$$Q_{\text{tri}} = O(\sqrt{\alpha}t + \log(1/\varepsilon_{\text{tri}}))$$

— 振幅増幅の計算量^[18]

$$Q_{\text{OAA}} = 3$$

$$Q_{\text{total}} = (Q_{\text{root}} \cdot Q_{\text{tri}} \cdot Q_{\text{OAA}}) = O\left(\frac{1}{\varepsilon_{\text{root}}^2} \log(1/\varepsilon_{\text{root}})(\sqrt{\alpha}t + \log(1/\varepsilon_{\text{tri}}))\right)$$

各クエリでのコスト(ブロックエンコーディングの実装コスト)が**Polylog(N)**になれば量子優位性(?)

[17] Metger, T., and Yuen, H.: 2023 IEEE 64th Annual Symposium on Foundations of Computer Science (FOCS) (2023)

[18] Toyozumi, K., Yamamoto, N., and Hoshino, K.: Physical Review A(2024)

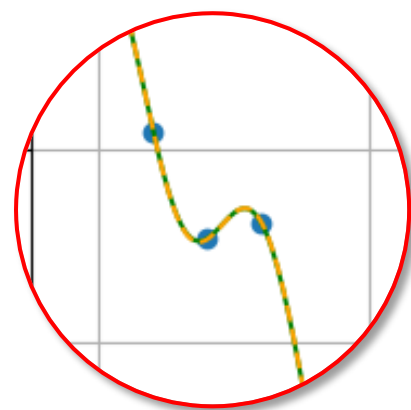
誤差に関する考察

正方形構造と長方形構造で精度に差が出たのはなぜか？

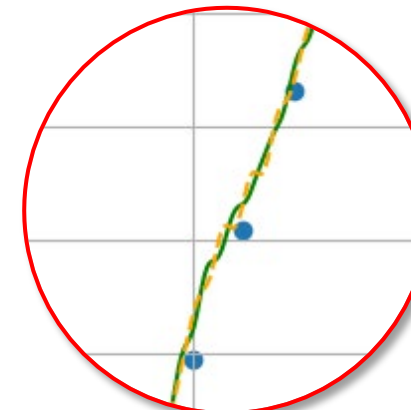
平方根の多項式近似の誤差に条件数が効いているから

O 記法では $Q_{\text{root}} = O\left(\frac{1}{\varepsilon_{\text{root}}^2} \log(1/\varepsilon_{\text{root}})\right)$

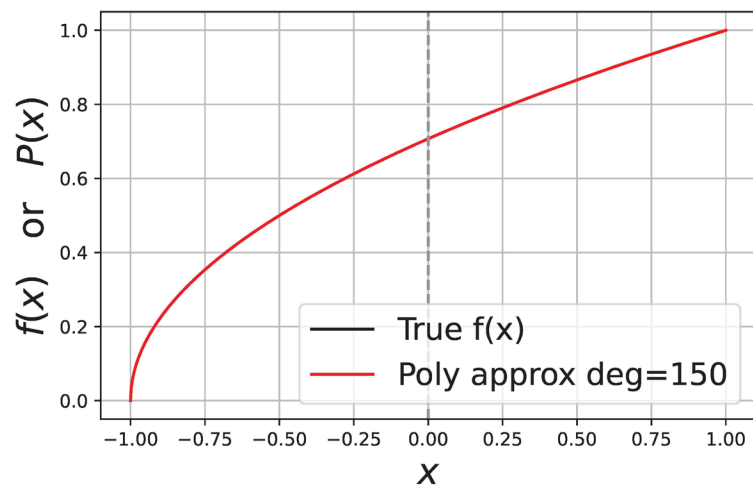
と陽に条件数は出てこないが...



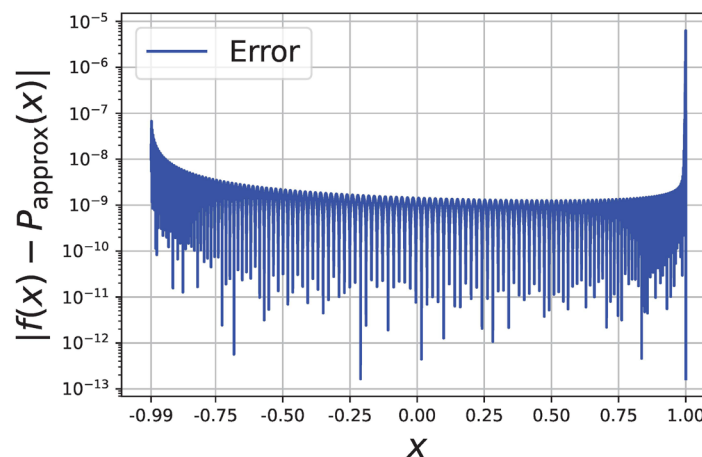
正方形 (絶対誤差 $10^{-8} \sim 10^{-5}$)



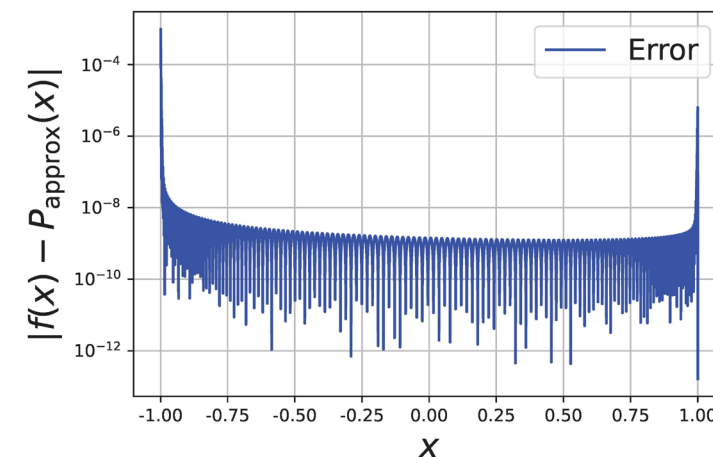
長方形 (絶対誤差 $10^{-2} \sim 10^{-0}$)



$f(x) = \sqrt{2x-1}$ と近似多項式 $P(x)$



プロット範囲 (-0.99, 1)



プロット範囲 (-0.999, 1)

近似範囲が左に行く(条件数が大きくなる)ほど誤差が増大！！

— 目的

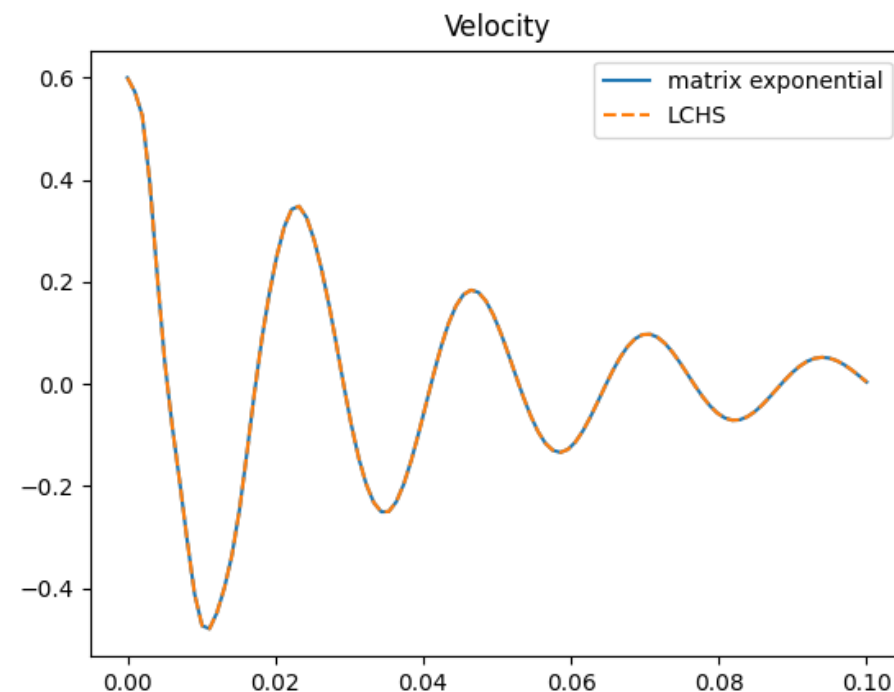
- 固体の動的解析のための量子アルゴリズムの開発
- 量子特異値変換(QSVT)を用いたハミルトニアンシミュレーション(HS)による単振動問題の求解

— 結論

- 提案手法により単振動の解析を行うことが可能
- 計算固体力学の量子加速の議論のための**第一歩**
- 実用に向けて様々な問題

— 課題と展望

- 効率的なブロックエンコーディング手法の開発
- 非保存 非線形問題への拡張
- アルゴリズム自体のアプリケーションの検討



所感—これまでの研究を通じて—

17/17



✓ 固体力学を対象として

- NR法, 構成則計算はじめ, CAE技術の発展は(当然)古典コンピュータと密接
⇒据え置くパーツ, 量子で作り替えるパーツ
 - 読み出しができない, 時刻歴もわからない 統計量は得意
⇒CAEに必要な情報は得られるか? 現場で必要としていることは?(大学研究の弱い部分)
 - 定数倍に苦しんでいる現実と指数的スケールを重んじる理論のギャップ
⇒真の優位性はでるか(超マルチスケール解析 超大規模災害解析のような新規課題?)
 - 使ってみた論文の蔓延 新規参入の困難
⇒何がしたいか(すぐに結果がほしい, FTQCを見据えてじっくりやりたい, できるかできないか知りたい)
- ✓ 上記は量子技術に詳しくなくても考えられること CAE側の長年の経験や感覚, 要求をしっかりと提示する
- ✓ “量子でできること”にすり寄りすぎない できないことを明らかにするのも一つの目的